

国語科における伝記を用いたキャリア教育の授業開発に関する研究
—特別活動との関連を視野に入れて—

A Study of development of class on Career Education using biographies in Japanese Language
—In View of Connection with Extracurricular Activities—

谷山 孝直
(教育学領域)

I. 問題意識と研究の目的

キャリア教育は、多様化し予測不可能な社会を生き抜くために、取り入れられてきた教育である。日本でキャリア教育が始まってから、政策によってその在り方は変化してきたが、2017（平成29）年に告示の小・中学校学習指導要領では、その総則に「キャリア教育」という言葉が初めて用いられた。具体的には「特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じてキャリア教育の充実を図る」とされ、学級活動の内容項目(3)に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が加えられた。これからのキャリア教育は、教科・領域等でキャリア教育の要素を取り入れていくと同時に、学級活動の時間を用いて充実を図っていくことが求められている。

しかし、実際にはキャリア教育を進めていく上で多くの学校で重視されているのは、総合的な学習の時間や特別活動等の時間であり、現在までに多くの実践が行われてきた。一方で、教科におけるキャリア教育は、そもそも教科で行うことがあまり知られておらず、教科中心でキャリア教育を進めたという実践報告も少ない。教科におけるキャリア教育は十分な研究が行われていないのが現状である。

そこで、本研究では、教科におけるキャリア教育の現状と各教科におけるプロトコルを明らかにした谷山（2017）の研究を基に、小・中学校における教科を通じたキャリア教育のプロトコルを比較し、特に、国語科に焦点をあてて、その独自性を明らかにしていった。そして、学級活動との関連も視野に入れつつ、国語科における伝記を用いたキャリア教育を実践し、その効果を検証した。さらに、授業開発の成果をもとに、国語科と学級活動の横断的なカリキュラムモデルを提案した。

II. 論文の構成

第1章 研究の目的と問題意識

第1節 研究の目的

第2節 キャリア教育の理念と政策

第3節 教科を通じたキャリア教育の現状

第2章 実践分析から見る国語科におけるキャリア教育の特徴

第1節 調査方法

第2節 全体的な傾向

第3節 分析から明らかになったプロトコル

第4節 国語科におけるキャリア教育実践の独自性

第3章 国語科と学級活動における「伝記」を用いたキャリア教育実践

第1節 実践の背景

第2節 実践の構想

第4章 実践の分析・考察

第1節 質問紙による評価

第2節 抽出児の変容

第3節 考察

第5章 まとめと今後の課題

参考文献

調査資料

あとがきにかえて

III. 論文の概要

第1章 研究の目的と問題意識

本章では、キャリア教育の基本的な考え方と、これまでのキャリア教育の変遷、そして、教科におけるキャリア教育の現状を明らかにしていった。

特に、第3節では、教科におけるキャリア教育の実態を調べた。「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」では、年間指導計画の作成数と、年間指導計画の内容から、教科におけるキャリア教育は、小学校・中学校ともに、総合的な学習の時間や特別活動の時間に比べて十分に行われていないことが示された。また、日本進路指導協会機関誌『進路指導』でも、今までに掲載されてきた実践のうち、小・中学校の教科に関する内容でまとめられたものは全実践数のわずか10%程度であった。また、各学校に配布されている『中学校キャリア教育の手引き』は、各教科で1実践ずつ

紹介されているものの、教科の特性をどのように生かしたらよいかという傾向をつかみ他の実践でも活用していくには不十分であることを捉えた。

第2章 実践分析から見る国語科におけるキャリア教育の特徴

本章では、谷山(2017)を加筆・修正し、特に教科の中でも、国語科・社会科・算数(数学)科・理科・生活科の5教科に着目し、キャリア発達段階ごとの実践数やアプローチの仕方、獲得しようとしている能力(基礎的・汎用的能力)などの比較を行い、各教科の特徴と傾向をまとめた。この結果を基にして、国語科におけるキャリア教育の独自性を検討したところ、国語科は、基礎的・汎用的能力を身につけるために行う様々なキャリア教育実践の基本を担っている言語活動の中心であること、また、学級活動との関連も視野に入れつつ自己理解・自己管理能力に関しては、育成することが可能であることが示唆された。

第3章 国語科と学級活動における「伝記」を用いたキャリア教育実践

本章では、第2章での示唆と、谷山(2017)の指摘から、国語科における「伝記」を用いたキャリア教育実践を開発し、実践した。

第1節では、キャリア教育実践を行うにあたっての理論と背景を明らかにした。まず、伝記のキャリア教育における教材としての意義を示した。A. バンデューラ(1975)の社会的学習理論の視点から見ると、伝記は児童にとってモデルとなり、生き方を考えることができ、さらに、キャリア自己効力を高める効果も期待できることが予見された。特に、児童がより生き方について考えられるように、児童の既知のシエマに刺激を与える「エピソード」に着目させることで、生き方について深く考えさせることができると考えられた。また、先行実践ではあまり行われてこなかった自伝を書くという活動はナラティブ・アプローチの視点から、自らのキャリアを肯定的に意味づけ直し、未来を展望

することができることも分かった。さらに、学級活動と教科の連携をどのように行っていくのかを明らかにした。そこでは、教科等の学びの蓄積を生かしながら、学級活動においては、児童のキャリア発達を促せるように目標設定と振り返りを効果的に行っていくことが、教科等と学級活動の連携の可能性として挙げられた。

第2節では、児童の実態を示し、それを基にして、仮説を立て、単元を構想し、実践の内容を示した。仮説は、第1節の内容を踏まえて、「仮説Ⅰ：伝記を読んだり生き方を深めたり広げたりする際に、エピソードに着目することで、自分の生き方についてより深く考えられるだろう。」「仮説Ⅱ：自分伝記を書く際に、自分の今までの生き方を肯定的に捉えられるように振り返ることで自己理解が深まり、自己肯定感が高まるだろう。」「仮説Ⅲ：学級活動の際に、将来像を見通しながら行動目標を立てることで、今と将来のつながりを意識した目標設定をすることができる」の3つを立てた。

実践は、愛知県内の公立小学校5年生3クラスを対象に筆者がすべての単元について授業を行った。単元は、国語科が大きく3つの構成に分かれ、その後学級活動を行うという形にした。国語科の単元の流れは次の通りである。第1次では、伝記の特徴を理解し、特にエピソードに着目することを示した。第2次では、児童のお気に入りの伝記を紹介しあう活動を行い、生き方について考えさせた。第3次では、自分の生き方を振り返り伝え合う活動を行い、生き方についてさらに考えを深めさせた。単元の終末には、伝記の人物の生き方と自己の生き方から、これから自分は「こんな人になりたい」を考えさせた。この活動を生かして、学級活動では「こんな6年生になりたい」という理想像を立てさせ、そのために何を努力していくのかという行動目標を立てさせるような授業を展開した。

第4章 実践の分析・考察

本章では、実践の効果の検証と考察を行った。

第1節では、質問紙による調査の分析を行った。質問紙では2つの調査を行った。1つは本実践から向上

表1 調査Ⅰ(4件法)の事前・事後調査の平均得点

		事前平均	事後平均	有意確率
質問1	自分にはいいところがあると思う。	3.13	3.39	.000***
質問2	自分の興味や関心がわかっている。	3.07	3.25	.070 ⁺
質問3	自分の長所や短所がわかっている。	3.13	3.35	.028*
質問4	自分の過去を振り返ることができる。	3.16	3.10	.572
質問5	自分が生きる上で大切にしたいことがわかっている。	3.34	3.30	.716
質問6	自分の将来のために今から計画を立てている。	2.68	2.70	.894
質問7	自分の将来のために何をするのがよいかわかっている。	3.12	3.12	1.000
質問8	具体的な将来のイメージが持っている。	2.98	2.93	.614
質問9	世の中には様々な働き方や生き方があることがわかっている。	3.46	3.60	.094 ⁺
質問10	今行っていることが将来にどのようにつながっているかわかっている。	3.01	2.95	.572

+ = p < .10 * = p < .05 ** = p < .01 *** = p < .001

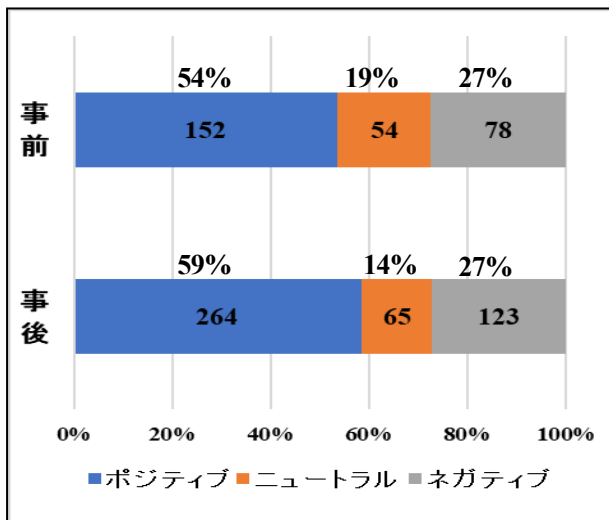


図1 調査IIの記述内容のポジティブ・ニュートラル・ネガティブの件数の変容 (筆者作成)

が期待される「自己理解能力」と「キャリアプランニング能力」を測定する質問を筆者が作成した(調査I)。もう1つは、自己理解の質の向上を測定するために「Who am I?」(WAI 技法)を参考に子どもたちに「私は・・・」から始まる文を最大20文、10分間で回答を求めた(調査II)。

調査I(表1)では、事前と事後の得点をt検定にかけたところ、「質問1:自分にはいいところがあると思う」が0.1%水準で有意に増加した。これは調査IIでも、実践前後で児童のポジティブな記述の割合が54%から59%に増加した(図1)。このことから、過去を肯定的に振り返ったり、他者から過去を認められたりする中で自己肯定感が高まっていったことが明らかになった。また、調査Iの「質問2:自分の興味や関心がわかっている」は10%水準で増加傾向、「質問3:自分の長所や短所がわかっている」は5%水準で有意に増加した。一方、調査IIの回答の内容を松原(1999)を参考にしながら6つに分類して、実践前後の回答の割合を調べたところ①嗜好・欲求について30.1%から30.8%、②能力・適性について29.1%から29.9%へと増加の傾向が見られた。したがって、調査Iの「質問2・質問3」と調査IIの回答分類の前後の割合比較から整合性を確認することができ、嗜好・欲求や能力・適性についての自己理解が促されたことが明らかになった。また、調査Iの「質問9:世の中には様々な働き方や生き方があることがわかっている」は10%水準で増加の傾向にあり、伝記を読んだことによって、世の中にはさまざまな働き方や生き方があることに気付く児童も多くいたことも明らかになった。

第2節では、定性的な分析を行うために、抽出した児童4名の変容を分析した。その結果、伝記を読むことが代理的経験となり自己効力感が高まる児童が見られた。また、仲間と交流しお互いの良いところを再発見する中で、仲間意識と役割意識の醸成も確認できた。

さらに、日常生活の中で埋もれてしまっていた自己のキャリアを考えていくヒントになるできごとを、そのままにすることなく意味づけることによって夢を見つけられる児童も見られた。学級活動では、将来の理想の人間像から、理想の6年生像を思い浮かべ、その6年生になるために自分が何をしていくのかという行動目標を立てる姿が確認された。

第3節では、第1節と第2節の分析から仮説の検証を行った。仮説Iについて、調査Iの結果から、児童は様々な働き方や生き方があることについて考えることができたと判断された。また、抽出児童の記述などから、生き方について考える上でエピソードを用いる様子が見られ、一定の成果が確認された。仮説IIは、調査I、調査II、抽出児の分析から、自己を語り直す活動を取り入れ、それを他者からも肯定的に評価されることを通して、自己肯定感の高まりを確認できたため、仮説は立証された。仮説IIIは、将来の理想の姿と6年生像をつなげ、行動目標を立てられる児童もいたため、一定の成果は確認されたが、将来の理想の姿と6年生像をつなげることが困難な児童も見られ、課題を残すものとなった。

第5章 まとめと今後の課題

第5章は、本研究の成果を示し、国語科と学級活動の横断的なカリキュラムを提案した。

本実践では、人間関係形成・社会形成能力を伸ばすことを目的として話し合い活動(交流)を行ったわけではないが、話し合いの内容として「自分自身のこと」を話したことで、お互いのことを知ることができ、結果として、人間関係形成・社会形成能力を伸ばすことができた。また、伝記という教材は、人の生き方を描いた文学であり、それを読むこと自体がキャリアに関する情報を取り入れていることになるが、肯定的な自己理解も図りながら、自分がどのような人になっていきたいのかということを考えることで、伝記の人物がロールモデルとして認識され、結果として、自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力の両方が相乗効果として向上していった。さらに、国語科で成果目標掲げただけで終わらず、学級活動を通して行動目標を立てることにつながられたことで、一人一人の児童が将来のキャリアを展望しながら、目の前の生活について見通しを立て振り返ることを積み重ねていくなかでキャリア形成を行っていく1つの形を示すことができたと思う。

さらに、授業開発の成果を踏まえて、国語科と学級活動においては「自己肯定感と自己効力感に支えられた自己理解をした児童・生徒が、ロールモデルと出会い、自己の生き方を展望していくキャリア教育」というカリキュラムモデル(図2)を提案した。

このカリキュラムモデルの特徴は2つある。1つは、

ロールモデルと出会うことである。国語科は、伝記に限らず、物語の主人公や、説明文の筆者などの他者などと接触し、その行動や思いを読み取ることができる。この時に、その他者が自分にとってどんな意味があるのか考えることによって、他者が他者ではなく、ロールモデルになりうるのである。もう1つは、自己効力感と自己肯定感に支えられた自己理解をさせるということである。他者をロールモデルとする際に、自己理解をしていなければ、自分にとっての意味を見出すことはできない。さらに、キャリア発達の視点から、自分らしい生き方を見つけていくための自己理解は、自己肯定感が高く自己効力感のある自己理解であると考えられる。自己を語る言語活動を通して、肯定的な自己理解が促され、同時に、自己効力感も高められるような支援を取り入れている。

今後の課題として、2点挙げている。1つは、キャリアプランニング能力については、調査Iで定量的に分析することはできたが、定性的な分析は不十分になってしまったことである。もう1つは、仮説IIIでは、理想の姿と理想の6年生像をつなげる指導のあり方について、「理想の姿になるために、まず6年生ではどんな姿になっていたらいだろうか」といった支援を加える等、成長を段階的に見通して計画を立てさせるような指導が必要であることが挙げられた。

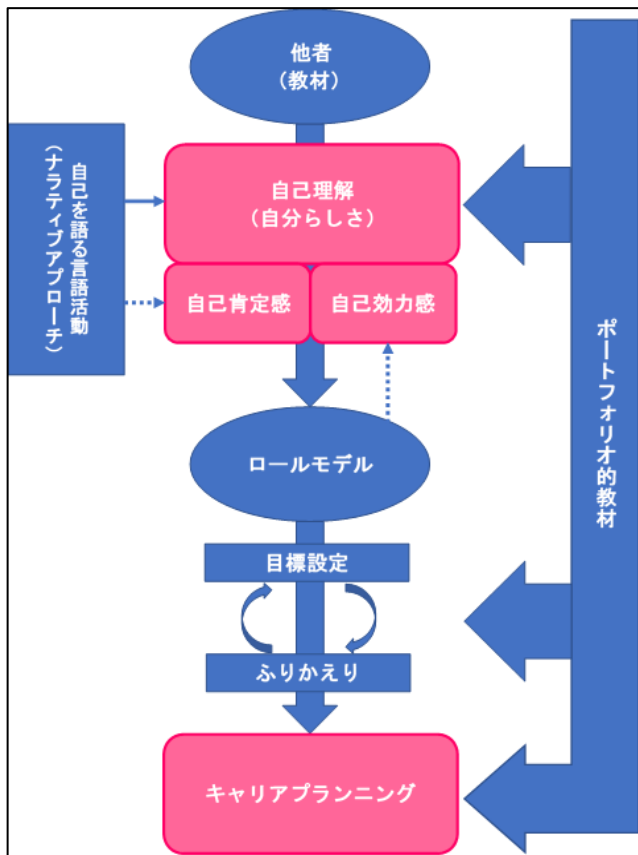


図2 国語科と学級活動の横断的カリキュラムモデル (筆者作成)

IV. 引用・参考文献

- ・安達智子 2013 「出来るかな？」を評価する 安達智子・下村英雄編著 キャリア・コンストラクションワークブック 金子書房 pp.1-4
- ・A.・バンデュラ編 1975 原野広太郎・福島脩美訳 『モデリングの心理学—観察学習の理論と方法』 金子書房
- ・中央教育審議会 2011 「今後の学校におけるキャリア教育・進路指導の在り方について(答申)」
- ・遠藤勇司 2008 カウンセリングルームにおけるナラティブプラクティス 現代のエスプリ 433, pp.119-128
- ・国立教育政策研究所進路指導・生徒指導研究センター 2013 「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」
- ・松原達也 1999 自分発見「20の私」 東京図書
- ・三村隆男 2004 図解始める小学校キャリア教育実業之日本社
- ・中熊豊仁・宮崎幸樹 2016 「伝記」教材を活用して主体的な読み手を育てる国語科学習指導 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要特別号 pp.115-122
- ・日本進路指導協会機関誌 『進路指導』 第77巻1号-第91巻3号
- ・小川高広 2016 一人一人の読みの創出を促す伝記学習の研究 上越教育大学学校教育実践研究センター教育実践研究第26集 pp.1-6
- ・佐藤洋一・左近妙子 2017 「深い人間的な学び」を創造する伝記教材の授業—「杉原千畝」(開発教材)と向き合う6年生— 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 66, pp.127-135
- ・佐藤洋一・吉川和良 2011 ノンフィクション(伝記)教材から「生き方」を考えさせる授業開発—「炎を見る」(伴田薫)の習得から論理的な読書レポート作成(活用)へ— 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 60, pp.147-155
- ・下村英雄 2008 最近のキャリア発達理論の動向からみた「決める」について キャリア教育研究 第26巻第1号 pp.31-44
- ・高橋浩 2015 キャリア・カウンセリングにおけるナラティブ・アプローチ 渡部昌平編著 社会構成主義キャリア・カウンセリングの理論と実践—ナラティブ、質的アセスメントの活用 福村出版 pp.188-229
- ・谷山孝直 2017 小・中学校の教科を通したキャリア教育のカリキュラムモデルの開発に関する研究 平成28年度愛知教育大学卒業論文
- ・高橋規子・吉川悟 2001 ナラティブ・セラピー入門 金剛出版